

『評論・社会科学』創刊百号にあたって

同志社大学社会学部長 尾 嶋 史 章

旧文学部社会学科の研究紀要として1971年に創刊された『評論・社会科学』が41年を経た今年100号を迎えることになりました。本号は、この記念号として、文学部の改組転換で発足した社会学部の生い立ちを各学科（専攻）の歴史も含めて振り返ると同時に、『評論・社会科学』の40年の歩みをご紹介します特集号となっています。本号巻末の総目次をみると、これまで掲載された論文・研究ノート・資料・書評は500本をはるかに越え、40年の厚みとともに、その中身には同志社での社会研究の多様性や先駆性が映し出されています。

この40年を振り返ってみると、1990年代を境として雑誌の性格が異なります。それは執筆者群の規模と雑誌の置かれている状況の変化に関わるようです。『評論・社会科学』の創刊号で伊藤規矩治先生は、同志社大学文学部（人文学会）の機関誌である『人文学』が100名を超えた教員を支えるには「手狭に」なったことをこの雑誌が創刊された理由としてあげておられます。90年代半ばまでは、創刊された当時の規模が続いていたこと、また執筆者が教員に限定された「紀要中心の時代」だったことも背景となって、教員の研究活動の場として『評論・社会科学』があったのです。現在、どの学問領域でも国際化が叫ばれていますが、ここには1970年代から英文で書かれた論文が掲載され、1990年代半ばまでに掲載された英文論文は13本のほりです。この時期の社会科学系の雑誌としては非常に多く、同志社に「内生」している国際主義が育んだ先進性をみることができます。

1990年代末からは執筆者の規模の拡大とその質的变化が起こります。大学院生が執筆した論文の掲載が認められるようになり、2005年4月には旧文学部社会学科の4専攻に加えて旧文学部文化学科の教育学専攻が教育文化学科として加わり社会学部が誕生しました。この結果、創刊当時（1971年）の専任教員24名と比較すると、1990年代末には大学院生も加えると執筆者群は2倍以上にふくれあがり、現在は専任教員の数だけでみても2倍、さらに院生も加えると3倍以上に拡大しています。また2009年からは大学院生の論文に対する査読も行われるようになり、その姿は大きく変貌しました。このようにみると、雑誌の変化には、時代の学術研究動向と同時に大学や研究者の置かれた時代状況が関わっていることがわかります。

150号, 200号を迎えるときに『評論・社会科学』はどのような姿になっているのでしょうか。遅くさらに革新した同志社の社会研究の姿をそこにみることができるよう, 大事に育てていきたいと思っております。